

第 100 回公開シンポジウム

## 学校で絵を描くということ～アフリカの子どもから考える～

◆ プレゼンター

竹ノ下 祐 二

中部学院大学教育学部准教授／霊長類学・人類学

◆ パネリスト

前 田 豊 稔

甲南女子大学総合子ども学科准教授／美術教育学

◆ 司

会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 100 回子ども学講演会を開催いたします。今日のテーマは「学校で絵を描くということ～アフリカの子どもから考える～」です。

子どもは、どのようにして絵を描けるようになるのでしょうか。日本では、子どもは家庭や幼稚園、小学校などで自由にのびのびと絵を描きながら、自然と上達するのだと思います。しかし、それは万国共通なのでしょうか。私たちが、アフリカの子どもたちに絵を描いてもらった経験から、学校で絵を描くということについて考えてみたいと思います。今日のテーマはアフリカの子どもがメインになります。

今日の基調講演をしていただくのは、竹ノ下祐二先生です。中部学院大学教育学部准教授でいらして、専門は霊長類学・人類学です。簡単にご略歴を申し上げます。竹ノ下先生は、京都大学大学院理学研究科修了で理学博士、財団法人日本モンキーセンター、リサーチフェローを経て、2007 年から現職です。大学院在学中より、アフリカのガボン、コンゴなどでチンパンジーやゴリラの野外研究に従事する傍ら、地元の人々や子どもたちの支援活動をしていらっしゃる先生です。最近は、協同育児をテーマにして人とゴリラの子育て、子育ての比較研究などもされています。

それから、パネリストとして本学の前田豊稔先生にお願いしております。本学の総合子ども学科の准教授で美術教育学がご専門で、ご略歴は、神戸大学教育学部卒業後、同大学院研究科を修了されています。研究テーマは『美術的表現力の構築についての学習論』ということです。では早速、竹ノ下先生の基調講演からお願いいたします。

竹ノ下：皆さん、こんにちは。今ご紹介していただきましたように、私の専門は人間ではなくて霊長類です。人間も霊長類の仲間ですが、人間以外の霊長類、サルの仲間が研究対象です。なので、今日はゴリラの話も交えながらお話させていただきます。

## はじめに

私はこの20年ぐらい、アフリカ中部のいろいろな国で、ゴリラとチンパンジーの調査をしています。ゴリラの調査をする時はどのようにして研究をするかという、まずゴリラの住んでいる森の中に歩いて入って、ゴリラの群れを見つけるとご挨拶をします。ご挨拶してから、見せていただいています。これは本当です。ですから、今日は皆さんに来ていただいているので、ゴリラの挨拶を皆でやってみたいと思います。ゴリラの挨拶というのは、このような感じです。(ゴリラの挨拶)。



皆笑っていますが、でも私たちは大真面目にやっているんですよ。この後、少し映像もお見せします。皆さんも一緒にやってみますか。ゲップ音といって、ゲップのようになるべく低い音で、「ゴリラの挨拶」をします。皆さん、私はゴリラになって「こんにちは」と言いますので、皆さんも言ってください。(ゴリラの挨拶)。

では、今、日本の動物園にゴリラがどれぐらいいるか知っていますか。今、日本の動物園にいるゴリラは全部でたった24頭です。そのうち子どものゴリラは4頭しかいません。1頭が東京の上野動物園にいます。そして2頭が名古屋の東山動物園、そして京都の京都市動物園に1頭います。「ゲントロウ」という男の子のゴリラです。ゴリラは、そんなに子どもを産まないの、この子どもたちが大きくなるといよいよ日本でゴリラの赤ちゃんを見ることができるようになるのはまた数年後になってしまいます。ゴリラの赤ちゃんを見てみたいという人は是非、動物園に行ってみてください。

今日は、皆さんに私の話を通じて分かってほしいこと、持って帰ってほしいメッセージが3つあります。1つめは、学力とは何かということです。皆さんはゆとり世代と言われて育ってきたと思います。「基礎学力がない」など色々なことを言われますが、学力とは、国語、算数、理科、社会、英語などのいわゆる5教科の成績だけなのでしょうか?よく、PISAなどの国際学力比較テストで日本が何位だという話がありますが、そのようなものが学力のすべてではないのです。そのことを分かってもらいたいと思います。

2つめは、日本の幼児教育はすごいということです。私がアフリカに行ってアフリカの子どもたちやアフリカの幼稚園とか、学校などを見ていろいろなことを考えますが、ひるがえって日本の幼児教育を考えると、ものすごいことをやっているのだと感じます。

3つめは、どんどんと海外に出て行って欲しいということです。私は幼児教育の素人ですが、そんな私でさえ、外国の幼児教育に触れることでたくさんのかんじをかんじます。今日この話を聞いてくれている皆さんは将来、幼稚園の先生とか保育士になりたいという人がたくさんいると思います。そんなみなさんなら、私よりもっと多くのことをかんじるでしょう。普通に外国に観光旅行に行った時でもいいので、近くに幼稚園があったら、覗いてみてください。そういうことをするだけで、全然違うものを見つかることができますと思います。自分たちのすごさも分かるし外国の凄さも分かります。そのようなことを分かっても

らおうと、今日はお話をしたいと思います。

## アフリカという国はない

まず、アフリカを知らない人がたくさんいるので、基本的なことを言います。アフリカという国はありません。それぐらいは知っていますか？しかし、実際に私が会った人の中には、〈南アフリカワールドカップ〉が、南アフリカ共和国という国で開催されたということを知らない人がいました。その人たちは、南アフリカとはアフリカという国の南部だと思っていたのです。

アフリカには全部で 52 の国があります。総人口は約 5 億人です。アフリカ全体の面積は日本の約 80 倍あるのですが、人口は 4 倍ぐらいしかいないから、人口密度は 20 分の 1 ぐらいになります。広い広い大陸がいくつもの国に分かれていて、自然も豊かなところです。この広いアフリカをひとくりに語ることはできないんです。

アフリカについて考える時には、植民地と差別の問題に触れないわけにはゆきません。アフリカのほとんどの国は、かつてヨーロッパの植民地でした。この図は植民地を旧宗主国ごとに色分けをして示したものです。このようにアフリカはヨーロッパに分割支配されていました。ヨーロッパの人たちはアフリカから地下資源と人間を奪っていきました。アフリカの人をたくさん捕まえて、南アメリカに送りました。そして南アメリカで奴隷として働かせ、農業などで生産されたその資源をヨーロッパに持って行きました。今でもアフリカ人は、差別をされています。しかも「アフリカ人だから」と差別されています。たとえばこの前、総理大臣の諮問機関である教育再生会議というメンバーだった曾野綾子さんという作家が、「アフリカ人というのはマナーのなっていない人で、一緒に暮らすのは無理だけれども、介護などの労働力として使えばいい」というむちゃくちゃなことを新聞に書いて大問題になりました。さきほど述べたように、アフリカには 5 億人の人間が暮らしている。一つの国ではなく、たくさんの民族がいて、たくさんの文化があるのです。それをひとくりにして「アフリカ人はこうだ」というのは誤りであるということを知っておいてください。

## ガボンについて

今日のお話は、そんな広いアフリカのど真ん中、ちょうど赤道直下にあるガボン共和国が舞台です。

ガボンという国の名前を聞いたことがありますか。ガボンの面積は日本より少し小さいぐらいですが、人口がたったの 160 万人しかいません。160 万人というのは東京都の人口の 10 分の 1 ぐらいです。とても人数は少ないのですが、でも 27 の民族があり、それぞれ言葉が違います。人口が少ないので、豊かな森林が残っています。だからゴリラとかチンパンジーが住んでいます。

みなさんにガボンについてもう少し親しみを感じてほしいので、ガボンにゆかりのある人物を紹介したいと思います。

この人、誰だかわかりますか。アルバート・シュバイツァー博士です。ドイツ人のパイプオルガンの奏

者だったシュバイツァー博士は、ある時「アフリカに行って人々を助けよう」と思い立って、医師になってアフリカで医療援助をしました。ノーベル平和賞も受賞しています。日本でも年配の人たちなら、シュバイツァーといえばアフリカの医療援助、というふうに知っていると思いますが、その場所がガボンだということはあまり知られていません。

こんどは最近世界中で有名になっているガボン人を紹介します。この人、知っていますか。こちら側の人は知っていますね。サッカーのドイツリーグ、ドルトムントの香川選手です。香川選手はドルトムントの中心選手のひとりですが、横にいるのがドルトムントのセンターフォワードの、ピエール＝エメリク・オーパメヤンというガボン人ストライカーです。海外サッカーを好きな人なら知っていますね。日本人とガボン人がこうやって肩を組んで一緒に何かをやっているのをニュースで見ることができるのは、ガボンで研究をしている私にとってとても嬉しいことです。

## 子どもをめぐる文化

次に、ガボンの子どもをめぐる文化の話をします。

ガボンでは頻繁に子どもの「預け合い」をします。私の友達で人間の社会の研究をしている松浦直毅さんという人から聞いた話です。松浦さんがガボンの農村に行き、しばらくお家に住まわせてもらいながら調査をしていたら、2週間くらいしてから一人のおばさんが尋ねてきて、その家の子どもを抱いてどこかに行ってしまった。「子どもが連れて行かれた」と思っていたら、なんと実はその人がお母さんだったのです。おどろいたことに、子どもたちはお母さんがいない間、まるで自分の家の子どものように普通に暮らしていたそうです。

子どもが一人で誰かの家にきて、1ヶ月ぐらい滞在してまた一人で帰るということも普通にありますし、親が連れてきて置いて帰ったりすることもある。そのように、人々は頻繁に子どもを預け合っているので、子どもは親だけではなく色々な人に面倒を看てもらっています。

この写真で私が抱っこしている子どもは、この頃まだ一歳になっていなかったと思いますが、名前を「タケ」ちゃんといいます。私の名前「竹ノ下」の竹からとったんです。今年の5月にガボンに行ったらずいぶん元気に大きくなっていて、また一緒に記念撮影をしました。

ガボンでは、私にかぎらず、子どもが生まれたとき、親ではない誰かから名前をもらってつけることがあります。その同じ名前の人のことを「ディナ」と言います。彼は私のディナです。私は「タケちゃん」とは呼ばず、「ディナ」と呼びます。このタケちゃんも私のことを「タケさん」とは呼ばず「ディナ」と呼びます。ディナどうしは互いの分身のような関係です。だから私はこの人のお父さんのことを「お父さん」と呼びます。私よりも年下で、私が雇っている人なんですけれど。そして彼は私のことを「息子」と呼びます。

私のディナは、この写真のようにとても懐いてくれています。だから私もかわいがってあげます。ディナに対しては、日本でも、七五三とか入学など、ライフステージの節目で何かがある時には人がおいおいをくれたりしますよね。それと同じように、自分のディナには何かにつけ色々やってあげたりします。

ディナという慣習が、親ではない人たちが子どもの面倒を看するというシステムとして機能しているのが、とても面白い。日本に暮らしていると、子どもを育てるのは親だ、と思いこんでしまいがちですが、かならずしもそうではないのです。

それから「autonomy」とは、(うまい訳がないのですが) 自立性とか自発性という意味です。ガボンだけでなく、多くのアフリカの人たちに共通していることですが、人間同士の付き合いにおいて、自分が人に命令されること、人に命令することを嫌う傾向があります。それは、子どもの頃からそういうのがあって、それを大人も尊重しています。ずっと説教をしたりとかすると、ぷいと子どもがいなくなってしまったりするので、はじめから長々とお説教したりしない。大人と子どもでも、大人同士でも、お互いに相手を支配しない、強制しない。それがとてもいきわたっていて、小さい頃から子どもは自由に動き回っている。そのようなところが面白いです。

## ゴリラの研究プロジェクト

さて、そんなガボンという国で私はゴリラの調査をしています。まずは、ゴリラの映像を見てもらいましょう。

### 〈ゴリラの映像〉

これは、6歳ぐらいの男の子です。撮影しているのは私です。この映像、皆さんにはジャングルに見えると思いますが、これは開けた道です。ゴリラたちが道を渡ろうとしたら、私たち人間が近くにいたので、少しびっくりしてこちらをきょろきょろ見えています。そして、恐る恐る仲間が来るのを待ちながら渡っています。後ろから顔を出したのがお母さんです。怖い顔をして睨んでいるのがお父さんです。お父さんは大きいでしょう。お父さんはお母さんたちや子どもたちと人間の間に割って入って、「人間のことはしっかり見ているから安心して通りなさい」と言っているようです。実は人間もこのお父さんにいつも守ってもらっています。お父さんがいないと、乱暴なメスが人間を襲ってくることもたまにあるんです。子どもが出てきました。子どもはお父さんより手前を歩きます。後ろにお父さんがいるので安心して、少しスリルがあるから人間の近くで何かしたいのでしょう。

お父さんが後ろを向きました。これは、これはお前に背中を見せても平気だと、私たちにアピールしているのです。背中を見せるというのが強さのしるしです。すると、子どもが出てきて真似をします。真似はするのですが、お父さんみたいに人間を睨みつけるのは怖くてできない。だからあらぬ方向を見えています。お父さんは子どもがバカなことをしているのは知っていて、子どもを見ながら口をもぐもぐと動かして、大丈夫だよ、怖くないよと慰めます。そこで、私が挨拶をします。すると、分かったという感じで、お父さんは立ち去り、ほかのゴリラたちも後を追います。こんなふうに、まずは挨拶をしてから、観察をさせてもらっています。

調査をするとき、一人で森を歩くのは危険なので、地域の人たちに協力をしてもらっています。地域の人を調査助手として雇って、一緒に森を歩いてもらっています。調査を通じて地域の人々とのつきあいが深まってきたところで、私たちは地域住民に対する支援活動も始めました。これは、村の写真です。



この人は学校の先生です。生徒の弟とか妹を抱っこしている。このように、子どもたちは元気いっぱいですが、教育環境は整っていません。この写真は学校です。何もありません。あまりに何もないので、募金を集めて、子どもたちに学用品をプレゼントしました。しかし、このように物の援助は、結局一度きりのことにしかなりません。ほんとうに地域の人を支援するには、もっときちんと地域の人たちが自分たちで発展していけるような活動が必要です。そこで今、「ゴリラ村プロジェクト」というのをしています。



このプロジェクトは、ゴリラを観光に用いて、観光客も誘致して観光収入をあげようというものです。



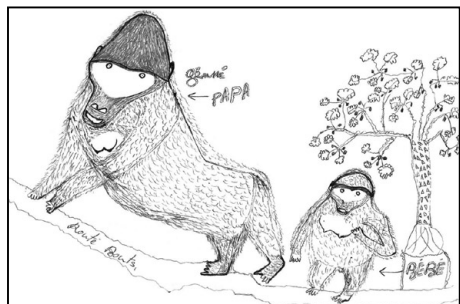
ただし、観光会社だけが儲かるのではなくて、地域の人たちが観光業ができるように研修をするのです。これは、今年の4月に研修をやってきたところです。観光業をするには、色々とおもてなしの仕方とか、説明の仕方を学ばないといけないので、そのような研修しています。これは、ちょっとふざけて日本式のあいさつの仕方を教えて、皆でやってみたところです。

### 調査助手が絵を描いた！

では本題の、絵を描く話をしたいと思います。

ゴリラの調査の拠点にしている、ガボンの村があります。そこは、一番近い町から 80 キロぐらい先ほどのような舗装していない道をいったところにある、人口が 150 人ぐらいの村です。その小学校で、絵画コンクールをしました。

絵画コンクールをしようと思ったきっかけになったのがこの絵です。何を描いてあるかはわかりますね。ゴリラです。この絵は、私たちと一緒に調査をしている調査助手が描きました。高等教育を受けていない、元猟師の人です。画材など持っていなかったのに、調査に使うメモ用紙の裏に二色ボールペンで描いたものを、私がフォトショップできれいにしました。とてもよく描けています。まず、ゴリラの胸のところには毛が生えていません。毛が生えていない胸を手で叩いて、音を出したりします。この絵では、ちゃんとそこは毛が生えていないように描いてあります。先ほどの映像を観た時に分かったと思いますが、ゴリラのオスは背中を反らせて強さをアピールします。この絵でも、ちゃ



んと背中を反らせてこちらを見えています。さきほどの映像のように、道を歩く時に人間の方を見て、このように背中を反らせてアピールしているというところを描いた絵なのです。子どもはお父さんの近くにいる、子どもも少し威張って胸たたきをしている、臨場感のある絵です。

背景あるのは、ゴリラたちが大好きな果実をつけるムサンガという木です。この木は、まさに絵に描かれたように、幹にとげがたくさんついていて、掌のように5つにわかれた葉があって、そしてオレンジ色の実が付いています。木の低いところは幹が横が広がっているのですが、その部分も写実的です。

もしかすると不思議に思っている人がいるかもしれませんが、ゴリラの頭のところが赤く描かれていますね。ニシローランドゴリラは頭の部分の毛がほんとうに赤いです。先ほどの映像ではやや茶色っぽかったかもしれませんが、森の中で見ていると「赤い」と感じます。少なくとも、赤いか黒いかといわれたら赤いです。絵を描いた人は、赤と黒の2色ボールペンしか持っていなかったたので、大胆に頭のところを赤く塗ったのです。

そしてこの体毛を見てください。体毛をこんなに描きこむのはなかなか情熱をかけて描いている感じがしますね。この絵は「描け」と言われて描いたのではなく、調査している時に描いていたものなのです。この人は多分、これが生まれて初めて描いた絵です。それまで絵など描いたことがなかった人が、突然このようなものを描いたので、びっくりしました。

そうすると、先ほどの写真に写っていた小学校の先生が、廃屋にあったベニヤ板を持ってきて、「絵を描きたいからマジックをくれ」と言うので、マジックを渡すとこのような絵を突然描きました。彼は20歳になっていませんでしたが、彼も自由に絵を描くという経験をしていなかったと思います。非常に優しい顔に描かれていて、とても綺麗な絵ですね。

先ほどのゴリラの絵を描いた元猟師さんは、こんなおもしろい造形も作りました。調査中にゴリラが休憩している時は私たちも休憩しますが、休憩中に彼が横で何かをいじっていました。何をしているのか尋ねたらこれを見せてくれました。これは、森の中たくさんいるシロアリがつくったシロアリ塚加工したものです。ほんやりシロアリ塚を見て、「ふと、これはゴリラに似ている」と思ったのだそうです。もともとシロアリ塚というのは少し穴が開いているのですが、よりゴリラに似せようとして、目のところと鼻のところに穴を空けて、さらに、口に見立てた穴には落ちていた果実をつこんで、これは、フルーツを食べているところだと言いました。50歳ぐらいのおじさんがこのようなことをして遊ぶのです。自然物を動物に見立てるという発想の豊かさにびっくりして、教育を受けていない人の持っている生の感性みたいなものに触れたような気がしました。



## 子どもによる動物絵画コンクールの企画

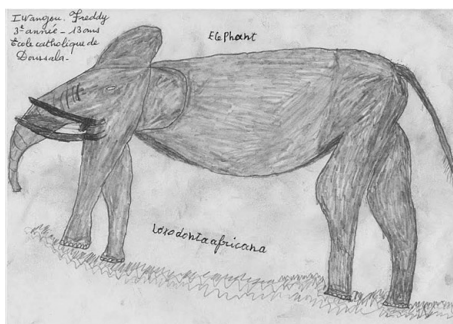
それで、大人がこんなことをするのだから、これを子どもたちにさせたら、どんなすばらしい絵を描くだろうかと思ったのです。じつは、獺師さんの描いた絵は絵葉書にしたら売れるのではないかと思って日本で売ろうとしました。でも今はもう誰も絵葉書などは買わないんですね。2000枚刷って200枚ぐらいしか売れなくて、大損しました。でも「アフリカの子どもたちの描いたゴリラの絵」だったら、売れるかもしれません。募金活動のグッズの絵柄にしようと考えました。売ったお金で小学校の備品や教材を寄付できたら、子どもたちのためにもなります。

ちょうどその時、偶然にも学校の校長先生から子どもたちに動物の絵を描かせたいから画材を寄付してくれないか、と申し出がありました。そこで、以前に募金活動で集めたお金を使って、画用紙と画材を買ってあげました。そして、ただ描かせるだけではもったいないので、きちんと表彰しようということでコンクールにすることにして、賞品を買いました。

実際のコンクールは、校長先生がやってくれました。全部で 58 人の子どもが応募をしてくれました。ただの学校行事ではなく、地域のイベントにしようということで、村長さんとか父兄とかに絵を見せてもらって、それぞれいいのを選んでもらって、多くの子どもが賞をもらうようにしました。そうはいつでも、やはり優秀な作品にはいい賞品をあげないと、せっかくコンクールをした意味がありません。そこで、村の偉い人たちと、わたしたち研究チームの仲間と一緒に一人ずつ好きな絵を選んで、それを「誰々賞」ということにしました。表彰式の日には小学校に住民を集めて、絵画を見せて、表彰しました。そして出来上がった絵は、町に持って行って、村の子どもたちが描いた絵として展示しました。

## 子どもたちの「作品」

今から子どもたちが描いた絵をお見せしたいと思います。1番いい絵を最初にお見せします。これが私の賞《竹ノ下賞》です。象の絵です。はっきり言って、うまくもへたでもない、何でも無い絵です。私がこれに賞を与えた理由は2つあって、全部きちんと描き終えているというのが1つ。そして、画用紙いっぱいを使っているというのが1つ。つまりこの絵以外に、画用紙いっぱいきちんと動物を描いた絵というのがなかったのです。



ところで問題ですが、これは何年生の絵だと思いますか？ 13 歳の子どもの絵です。日本ですと中学生です。美術の先生の前で私が絵画の評価を述べるのは恥かしいですが、日本の中学1年生が、動物園のスケッチ大会でこの程度の絵を描いたとして、これが賞をもらえるとはとても思えません。私は「こっちの子どもは、13 歳なのにこんなに“描けない”のだ」と思いました。

次の1枚。これは今年から京都大学の総長になった山極先生の《山極賞》です。最後まで描き終っ

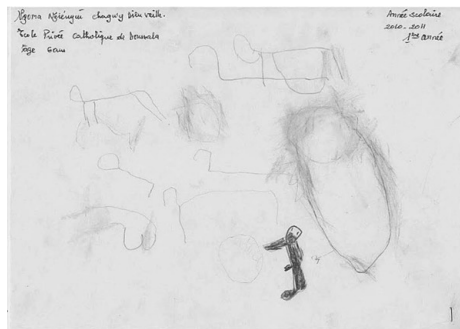


ていませんね。この辺りは色が塗れていません。ところが山極先生はゴリラが大好きなので、ゴリラを描いていたから賞を与えてしまいました。ちなみに、これは15歳の絵です。この絵をみて何かおかしいと感じませんか？私には、何かを模写した感じがしました。

これは近くのコンジ村の村長さんの賞です。これは15歳の子どもの絵です。これはカバです。この絵を描いた子は村長さんの息子です。そしてドゥサラ村の村長さんが、自分の子どもの絵に賞を与えたのです。色も塗っていない。しかもカバなのに動物の名前のところに「ゾウ」と書いてあります。実は、絵画コンクールを提案した校長先生も、自分の息子に校長賞を与えました。別の村の村長さんもやはり自分の子どもに賞を与えました。そして、子どもによってもらう賞品が違うことが問題になり、表彰式は一転、大喧嘩になってしまいました。

別の絵を見てみます。これは8歳の子ども絵です。たぶん図鑑を見ながら一生懸命描いているのでしょうね。けれど、せっかくの画用紙の全体を使えていない。この絵は少しましですが、やはり画用紙の全部は使えていません。これは6歳の子ども絵です。みなさんはここまで、13歳や15歳の子どもの絵がどんなものか見てきたから、6歳の子どもだったらこの程度の絵だな、と思うでしょう。けれど、これが日本の子どもの絵だとしたら、どうでしょう？6歳だと、幼稚園の年長、小学校1年生ですね。

この絵は鉛筆でたくさん下書きをしたあとがありますね。ゴリラを描こうとしているのだけれど、うまく形が描けなくて、何度も描き直しをしながら、いろいろな線を何度も引いていることがわかります。おそらく、どうも上手くいかないうちに期日がきて、この部分に色を塗って間に合わせたのでしょう。この絵には、絵を描く上で、非常に苦労している感じが見えてきたわけです。丸写しではなく、自分で描こうとした子どもは、こんなに苦労をするのです。写している子どもでも、写すことすらあまり上手にはできてない。



結局、期待したようなすばらしい絵は出てこなくて、表彰式も台無しになってしまうという、私にとっては大失敗という結果になりました。けれど、描いてもらったすべての絵を近くの町で、ゴリラの村の子どもたちの絵画展というのを開催したら、結構評判がよくて、皆さん見てくれました。そして、村の人たちも、町に出たときには見にきてくれて、自分の子どもの絵が出ていたと喜んでいました。というのが絵画展の顛末です。

## 動物を見ていない村の子どもたち

この経験で私は何を考えたか。少し考察をします。

まず、絵画展をやっではじめて気がついたことがありました。それは、村の子どもたちは日頃、動物を見たことがなかったということです。意外なことですが、考えてみれば無理もないことでした。アフリカの自然豊かな国で、その中でも、ゴリラの住む森の傍の村に住んでいる子どもたちです。そんな自然

の中で暮らしている子どもたちだったら、きっと、毎日、動植物をたくさん見ているだろう、と思っていたら、実は見ていない。なぜ見ていないのか。村の子どもたちは、普段そんなにゴリラのいるところに行ったりしないんです。それは、日本の子どもみたいにゲームばかりをしているからではありません。村の子どもたちは、普段は畑仕事など家の手伝いをしています。ふつう、人間がいるときには畑に動物は来ません。だから見る機会がありません。畑に動物が来ることがまったくないわけではありませんが、来たら作物をあらされて大変なので、大人たちは動物をよるこんで見たりせず、追い払います。だから、子どもたちが動物と出会う時というのは必ず敵対的な場面で出会うのです。動物に出会ったら、相手が逃げるか自分が逃げるかです。だからきちんと見たことがなかったのです。そのことに、私は絵を描かせるまで思い至らなかったのです。

そう思ってこの絵のことを考えなおしてみます。この絵を描いた猟師さんは、絵を描いた経験は乏しかったに違いありませんが、それまでに5年ぐらいい、私たちと一緒にずっとゴリラを見ていたのです。それだけゴリラを観察したうえでの絵だったのですね。そして、絵の描きかたを学んだわけではなかったもので、逆に、作法にとらわれず、素直に「見たまま」を描くことができていたのですね。ただし、ここで言う「見たまま」とは、現実に自分の目の前にあったことではなく、心に焼きついている光景という意味です。

### お絵描きをしていない村の子どもたち

それに対して、村の子どもたちは、動物は見えていません。また、村の学校では日本の幼稚園や学校のように見たものを描くという活動をしていません。日本の幼稚園や学校では、見たものを描いたり、経験したものを描いたりする時間がたくさん用意されています。例えば、幼稚園で遠足に行ったら、その次の日に遠足の思い出を絵に描いたりします。そのように、経験したことを絵に描く。小学校にあげると、今度は、「外に出かけて行って、スケッチをしましょう」と、見たものを描く練習をすることになる。上手に描ける描けないは別に、見たものを描くという活動を日本ではやっているけれども、彼らはやっていない。だから「動物の絵を描きましょう」と言われても、見た経験も描いた経験もないので苦労したのです。

ガボンでは日本の青年海外協力隊の人がたくさん来ています。その中には幼稚園の先生もいて、現場でいろんな活動をしています。一度その人たちにお話をうかがう機会があったのですが、お絵描きの時間はだいたい、塗り絵をしているそうです。ほとんどが塗り絵で、スケッチをしていない。また、色鉛筆やクレヨンを持っている子どもが少ないので、1人1本ずつ渡していく。そして「1色で塗りなさい」と言うとその部分だけを塗って、絵を描きあげるという経験までしていない。

日本にいと、就学前から子どもはたくさん絵を描いていて、学校にあがる頃には、上手下手はさておき、誰もが普通に絵を描けるようになっていきます。だから絵画コンクールをすれば、どれ位に真面目に取り組んでくれるかはともかくとして、みなそこそこの絵が描けますが、それは実は、経験があつてこそだったのです。

保育、幼児教育を学んでいる皆さんは、心理学の授業で「子どもの絵の発達変化」というのを勉強したと思います。最初はひじを支点にして曲線を描く、そして次は、丸を描くようになる。そしてそのうちに、意味のあるものを描くようになる、それから、はじめは画用紙をはみ出したりしていたのが、次第に画用紙という枠を認識するようになる、というように、年齢が上がるにしたがって、次第に写実的な絵を描けるようになっていきます。そしてそれは、万国共通の、人間の子どもの特長ということになっていますよね。

しかし、そんな「子どもの絵の発達変化」というものは、日々絵を描くという経験をしていたらそのようになっていくものだけけれど、絵を描く経験がなかったらそのようにはならないということが、私がガボンでの経験から分かったことでした。そう思うと、絵の発達だけでなく、発達理論全体について、本当かなあ、という疑問がわいてきました。

### 学校とは何か、何をするとするか

次に、学校と地域の関係、学校とは何かということに関して考えたことです。今日は持って来れませんでした、子どもが学校外で描く絵は、結構よい絵なんです。私たちは、学校ではなくて、村の中で子どもに頼んで、子どもたちに自由に絵を描いてもらったりもしていました。その時は、見知っている自然のものを結構描くのです。それなのに、学校で「動物の絵を描きなさい」と言われた途端に、アフリカの子どもたちは、学校は自分たちに厳しく何かをさせるところという認識があるので、自由に描いていいとは思わず、発想として何も思い浮かばなくなってしまう。だから、写真を模写したりそういうことをする。学校で「のびのびと何かをしましょう」ということを実はやっていないのです。

それから、日本と同様に、子どもどうして学力の競い合いはしますが、絵のできばえを競う、ということ、子どもたちは多分やったことがなかったのでしょうし、親たちも経験がなかった。だから、描いた絵を採点して賞品に差をつけるというのが、子どもたちにも納得してもらえなかったし、大人たちにも納得してもらえなかった。村長さんが自分の子どもに賞を与えたというのは、私たちの感覚からすると、とてもずるいことをしているような気がします、「いい絵を選ぶ」「絵を採点する」ということ自体が分かっていないのだと思います。ガボンでも、大都市に行くと私立の幼稚園もたくさんあり、いろいろな競争的な活動もしています。ですが、素朴な村の人たちは「絵に点数をつける」ことの意味をよく分かっていなかったのかもしれない。

また、今回のコンクールが「学校行事」であるということも、いまひとつ村の人々に伝わっていませんでした。というより、実は学校で地域のイベントをしたのが初めてだったので、村の学校で行なう行事が村の人々にどのように捉えられるのか、私たちはよくわかっていませんでした。日本ですと、学校を核にして地域の人たちが集まることがありますね。たとえば、バザーをしたり。運動会や発表会などを保護者だけでなく、「地域の人も集まってください」というふうに、地域にも開かれた形で開催するところもあります。ところがドゥサラの人々には、そんな地域のコアとして学校をとらえていなかったし、学校行事は子どもが主役、という考えかたもなかった。そんなところへ、まるっきり日本でやっているよう

な発想で絵画コンクールをしてしまったから、色々うまくいかないことが起きてしまったと感じています。

日本の学校で子どもの絵画コンクールをやると、ふつうにうまくいくと思います。しかし、それは絵を描く部分での文化的な背景や、絵画コンクールを成立させる社会的な背景の上に成り立っていたのでした。私はガボンの村で絵画コンクールをやってみてはじめてそのことに気付きました。そして、「日本の教育はすごいのだな」と思うと同時に、アフリカで同じようなことをやろうとした自分は、「もう少し、地域に寄り添った形で何かができたのではないか」と反省しました。

## 学校は子どもを抑圧しているかもしれない

このような話から2つ話をしたいと思います。日本では、学校では子どもが主役という考え方がとても強く浸透しています。皆さんも授業ではそのように勉強をしていると思います。けれども、そう思っている、実は学校とか幼稚園というものは、もしかするとある部分では子どもを抑圧しているのかもしれない。

ガボンの子どもたちは、自由に絵を描いてもらったらわりと面白い絵を描いていました。そして、さきほど見せたように、大人になってから全く自分の発意で絵を描いたらすごいものを描く。それなのに、「学校」という場で先生の指導のもとに絵を描かせた途端にだめになってしまいました。でも、もしかすると、それはガボンに特有のことなのではなく、同じことが日本でも起きているかもしれない。日本の学校や幼稚園では、表現活動として子どもに色々なことをやらせています。それによって子どもの創造性がある程度育まれるのは間違いありません。しかし、創造性のある面は、学校という場でやらせた途端に消えてしまうかもしれない。そういうことに、教える側、やらせる側は、意外に無頓着だったりしないでしょうか。

## 図工、音楽、体育、生活

アフリカでの経験から私が日本の幼児教育に関してすごいと思ったことは、図画工作や音楽や体育を学校でやっていることです。それから、生活科というのがあります（生活科は私が子どものころにはありませんでしたが）。

私の子どもが小学校の時に生活科の宿題で、「春を見つけてきましょう」というのがあり、それに付きあったことがありました。何をするのかと思ったら、家の近所を歩いて、咲いている花の名前を調べたり、その絵を描いたりするのです。そんな、日常の生活体験をわざわざ学校で授業として子どもにさせているわけです。そのようなことはガボンではやっていません。ガボンの学校でそんなことをしたら、「なぜ、家で生活をしているのに、学校で生活体験をさせなければならないのか」となるでしょう。

けれども、ガボンの子どもたちだって、ふつうに家庭で生活をしていたら、ゴリラを見る機会などほとんどありません。ほんの1キロ離れたところにゴリラの群れがいたとしてもです。だから、もし子どもにゴリラを見せようと思ったら、近くに遠足にゆくなど、学校で連れていかないと見ないわけです。

日本では学校や幼稚園・保育所でよく歌を唄いますが、幼稚園や学校がなかったら自分はどれくらい歌を歌っていたらどうかと考えてみると、貴重な体験をさせてもらっているのだとわかります。絵を描いたり工作をしたりも同様です。こういうことを幼稚園や学校でやっているのが、日本の教育の素晴らしい点です。すくなくともガボンの幼稚園や学校ではそういう体験は得られない。日本では、国際的学力調査でいい成績をとるか取らないかということがよく話題になりますが、そうした「学力テスト」では測られないこの部分こそがすごいと思います。私は本当に絵が下手なのですが、それでも全然描いたことがない人よりは少しは描くことができます。それは日本で教育をうけたおかげです。

## 遊びを通じた学び

日本の教育のすごいところとしてもう1つ感じたのは、「遊びを通じた学び」です。日本では、小学校の低学年ぐらいまでは、遊びながら学んでいきます。運動遊びをする。造形遊びをする。幼稚園や保育所ですと、朝の自由遊びも保育の一部です。このような、遊びの中で学んでいくという考えかたが当たり前と思っていたら大間違いです。ガボンの幼稚園の先生に訊くと、「なぜ、幼稚園で遊ばなければならないのだ?」「幼稚園が終わったらずっと遊んでいるのに、園に来て遊ばなければならないのはなぜだ?」というように言われる。「遊びは日常ですることで、園に来てするのは勉強だ」と言われるわけです。そして、勉強は上から強制して教えていきます。のびのびとするのは学校ではない。むしろ、のびのびとやらないのが学校です。

今日の話とはずれますが、学校では公用語のフランス語以外は喋ってはいけないことになっています。27の民族があって、それぞれ自分たちの民族の言葉があるのですが、学校では始業から終業までは、フランス語しか喋ってはいけない。公用語を覚えさせるためです。大人たちに学校について聞くと、みな「学校はとても嫌だった」といいます。何が嫌だったかという、フランス語を話さないといけないことが嫌だったということでした。逆にいうと、フランス語以外の言葉で話すのを禁止されるのが嫌だったということです。ガボンの幼稚園・学校では、規範を身につけるためには禁止や規制をするのです。ところが日本では、あたまごなしに禁止したり規制するのではなく、のびのびと活動しながら、遊しながら、そのような規範を身につけていくようになっています。

日本では小学校で郷土学習をします。幼稚園などでも、郷土学習とまではゆかなくても、地域との関わりがとりいれられています。でもガボンの学校は校内がすべてです。学校と地域との関わりというのを持ちません。地域のことは学校ではなく、地域でやればいいじゃないかという発想になっています。しかし、地域教育の重要性は認識されていません。自分の住んでいる村の近くに、どんな動物が住んでいるのか。村の人たちはどんな生活をしているのかといったことは、学校外の生活体験で断片的に知んことはできても、きちんと体系的にその意味などを学ぶ機会が与えられていないのです。それを、日本の学校ではやっている。



## 日本の教育のこれから

ここまで私が話してきた、日本の教育のすばらしいところというのは、いわゆる5教科—国語、算数理科、社会、外国語—の話ではありません。日本の子どもの5教科の「学力」はたしかに高いけれど、それ以外の力、図工や音楽や体育や生活などの部分を、幼稚園や保育所や小学校で、生活体験を通じて身につけていくようになっている。案外、それが日本の社会を支えている部分ではないかと強く思います。

では、そのような日本の強さ、良さは今後どうなっていくのでしょうか。今、日本では、国が「教育再生」ということを言っています。そして、小1プロブレムとか学級崩壊などは間違った教育方針のせいだから、制度をかえて学校では規範意識というのがしっかり育てるようにしましょうという改革が始まっています。でも、学校教育の問題のせいで子どもの規範意識が育っていないのでしょうか。そんなことはないと思います。けれども、「学校でしっかりと厳しく規範意識を持たせよう」ということを今の総理大臣は言っているわけです。それはつまり、ガボンの幼稚園のように上から禁止や規制することで規範意識を身につけさせようということです。

それから、郷土学習というのもこの何十年か力を入れてきていています。私の子は、私が子どもの頃よりもずっと地域のことを学んでいます。それはよいことだと思います。しかし、その郷土学習も、教育基本法を改正して「国家というものを学びましょう」というように変わってきた。郷土学習ではなく国家学習にかわってゆく。それはまるで、公用語以外話してはいけないというガボンの学校のようにです。

私は、ガボンをはじめ、アフリカの国々にはいいところがたくさんあって、たくさん学ぶところがあると思っています。けれども、幼児教育、初等教育に関しては、日本と比べて足りないところ、よくないところが多いと感じています。だから、日本のよいところをから伝えることができればいいなと思います。けれど、今の日本が何をやっているかという、よいところを捨てて、アフリカのあまりよくない部分に似たことをしようとしているように思えます。このようなことをしていて大丈夫なのかと思っています。

改めて今日のメッセージをくりかえします。第一に、日本では子どもの「学力」についていろいろな意見が言われていますが、「学力」とは5教科の点数の問題ではないし、「生きる力」とは経済発展に貢献する力ではないはずです。もっと総合的に考えると、音楽の「学力」、体育の「学力」、図画工作の「学力」は日本はかなり高いレベルにいる。それが全く評価されていないのが、とてももったいないと思います。

第二に、日本の幼児教育、保育、初等教育では、生活体験を通じた学びをとてとても上手に行っている。それは誇りに思っているし、もっとしっかりとやっていくべきだし、どんどん海外に伝えていくべきです。

そして最後に、日本の教育や保育に関する気づきを得るために、若い人たち、特に保育や教育に関わる人たちは是非、海外に出かけて行って、外国で子どもと関わる機会を持って欲しいと思っています。

では、お話はここまでにしたいと思います。

一色：竹ノ下先生、どうもありがとうございました。アフリカの方から見て、日本の問題の提案もしていただきました。では、ここからはパネリストの前田先生にコメントをいただきたいと思

います。

では、よろしくお願いいたします。

**前田：**みなさん、こんにちは。ガボンの話を伺って、最初は楽しく聞いていたのですが、だんだんと日本の教育の核心を突く話しになってきました。日本の学校のことについて、ガボンで気づかれたことは、その通りだと思います。日本の教育制度のスタートは遅れましたけれども、内容的には西洋の教育制度をそのまま取り入れたわけですから、明治の改革の時には日本中に質の高い西洋の学校制度がそのままできあがったのです。その際とてもラッキーだったのは、西洋の制度をまねた日本の教育制度は、少しの遅れだけで最初からしっかりと質の高い内容が、日本の至る所に根付いていったということでしょう。そして、それを受け入れるだけの文化のレベルが、日本にはあったということも事実なのです。

それから、文化というのはやはり大切な要素になります。子どもたちは文化の中で生き人間になっていくわけですから、その文化の持っているさまざまなものを長い時間の中で身につけて、皆さんのような素敵な女性になったり、一般参加いただいた皆さんのような大人になったりしてきたわけです。もし違う文化だったら、皆さんも違う人間になっていたことでしょう。

また、よく引き合いに出される学力のことですが、日本は依然として世界のトップレベルなのです。どのようにいわれたとしても、これまでずっとトップレベルであったことには変わりないのです。1番ではなかったりしますが、ところが、その教育にかけるお金の額となると、日本は最低レベルです。日本の子どものために、日本の政府がかけるお金は OECD の中で最低なのです。そんな中で、日本の学校というのはこれだけの成果を上げる教育をしているわけです。ということなのか説明しましょう。日本の学校では大変多い人数、40 人程の子どもを集めて一斉に授業をします。殆ど発展途上国のような学校の形をとっているのですが、さまざまな方法を使って大変工夫して濃密な学習になるように勉強させているのです。ヨーロッパやアメリカの子どもたちは一クラス 10 数人です。人数の多い少ないは重要なことなのです。生じる問題は全然違うのです。日本の学校が悩んでいる多くの問題の内、人数を減らすことで解決する問題は多くあるといわれています。そのようなことを考えると、日本の教育・学校や先生方は随分と頑張っているといえるではないでしょうか。子どもたちは、少ない予算しかかけてもらえないのに、一生懸命勉強して良い成績をあげているということがよくわかります。

話を戻しましょう。学校というのはそもそも一体何なのかということを考えながら、ガボンのお話を伺っていました。学校というものはなにか、入ってみて初めてわかる、そういうものが学校というものなのです。学校が持っている独特の常識や文化、色々な決まりごと、それらは学校に入らないとわからないものでしょう。私の例ですが、私は中学1年生のある時まで試験の前に勉強をしてはいけなかったと思っていました。普段している勉強が、わかっているかどうかを測るのが試験だと思っていたのです。だから、試験の前に特別に憶えるなんてことはしてはいけなかったものだと思っていたのです。そんなのカンニングみたいです。

自分は先生の言うことが全部わかる。言いたいことも大事なこともわかる。それなのに、試験をす

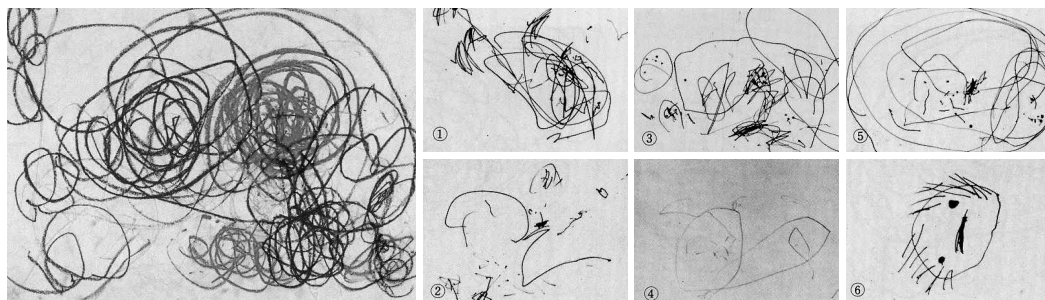
るとどうしてかそんなにいい点数ではない。なぜなんだろうと不思議に思っていました。また中学校のクラブ活動で野球部に入りました。野球はおもしろいけれど、クラブ活動の野球部は辛いものがある。試験前になったら、クラブが休みになりました。これはいい、休んでゆっくりできると、近くの銭湯に行つて、1時間ぐらいのんびり湯につかったり、友だちと会っておしゃべりをしたりして、気楽に楽しく暮らすようにしていたのです。こうして、頭をすっきりさせて試験を受けるのがいいことなのだと。だから、試験前というのは、私のお気に入りの期間だったのです。そういうのは、単なる私の勘違いなのでしょうか。

ところが学校というのはそうではなかった。試験前というのは、しっかり復習の勉強をして、理解したり憶えたりして試験を受ける。後はどうでもよい。そういう方法で勉強をしていくところだというのは、ずっと後になってやっと気づくのです。わかる、覚えるという学習が、単に憶えるということだったのです。

## 子どもの成長と描画の変化

今、竹ノ下先生の話を伺っていると、みなさんは子どもの絵の成長を思い出したでしょう。では、子どもの絵はどのような過程で発達していくのか、少しおさらいをしましょう。

最初はこうして腕でぐるぐるします。それが少しまとまってきて、意味づけしたりします。その辺りのもの、2歳から3歳辺りのものを連続してお見せしましょう。

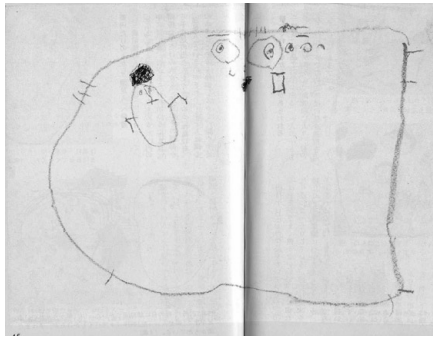


(参考「子どもの絵—成長を見つめて—」 東山明・東山直美共著 保育社)

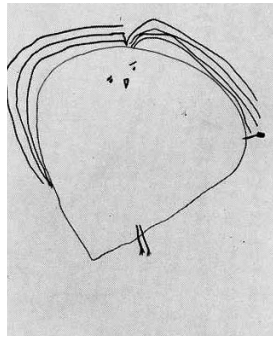
最初は運動するみたい、お父さんやお母さんが絵や文字をかいたりするのを真似たりして、このようにぐるぐるしたり、止まったり引いたりぐちゃぐちゃにしたりします。それから、どんどん進んでいって、丸い形がきちんと閉じて顔や何かの形のようになったりして、意味づけたりしていくのです。子どもは結構おもしろがり、集合させたり、動かしたりしてくる。このようにして、2歳ぐらいから3歳ぐらいにかけての子どもは、がんがん大量に描いていくのです。

さて、みなさん(学生たちに向かって)この絵(作品1)を憶えていますか。前に見た時、この絵は何の絵だと思いましたか。プールや砂場で遊んでいるとか、温泉につかっているとか、色々なみなさんは想像した絵でした。

この絵(作品1)は、自分がお母さんに抱っこされている姿を描いた絵でした。これは3歳の子どもが描きました。4歳前後の子どもは、このような絵を描きます。



作品 1「ママにだっこされている私」



作品 2「お母さん」



作品 3「お母さん」

私はこれを見た時、なんと正直な、なんと素敵な、その子どものリアリティ溢れる絵なのかと感心しました。真ん中の左上、虫みたいなのが自分で、この周り全部、砂場のように囲っている形全体がお母さんなのです。これまでの研究では、人の形が描けないからこのように描いていると言われてきたのですが、私はそういうことだけではなくて、この子どもには、確かにあのように認識しているから描いた絵だと思えたのです。お母さんに抱っこされるということは、実にあのような形に感じられるということなのです。それを子どもなりに過不足なく、正直に描き表している形だと私には思えました。つまり、子どもの認識と子どものリアリティが凝縮した絵なのです。そしてこの絵は、こういうリアリティ溢れる絵がよくあるように、2つの視点を持っています。お母さんに抱っこされている姿を見る(想像する)視点と、抱っこされている自分からお母さんを見る視点の2つの視点。この2つの視点から見たり知ったり感じたりする形が、二重にかぶさりながら凝縮した形、それがあの素敵な絵(作品1)なのです。

次に、この絵(作品2)も憶えていますか。「お母さん」の絵。

やっと人の形が描けるようになった子どもが、このように髪の毛をまっすぐ綺麗に克明に平行して描いた。これは並大抵のことではない。大変な苦労がないとできる絵ではないのです。ということは、どういことを表しているのでしょうか。お母さんを描くの、あのように髪の毛を描かないとお母さんを表したことになる。つまり、「真っ直ぐなロングヘアがとてもきれいな私の自慢のお母さん」を心から描ききっているのが、この絵なのです。つまりこれは子どもの必然。必然性から来る子どものリアリティといえるでしょう。

2つの絵に見られるこの2つのリアリティ、認識のリアリティと必然のリアリティ。これが子どもの絵を語る上で、とても大事な要素だと私は考えています。こういうときの子どもの絵は、その子は自分の試み、がんばってやるに至った表現方法を使ったり生み出したりして、やっとのことで表すことができたものでしょう。もちろん途中でできなくなったり、うやむやになったりするものの方が多いのですが、そこにある値打ち、その尊さは何にも代え難いものだと考えています。何とか絵が描けるようになって、誰にやらされるわけでもなく、うまくできる方法を教えてもらうでもなく、自分なりにとても素直にそして自然に、子どもが自分の思いを形にした絵、そういう絵の象徴が、あの2つの絵なのです。

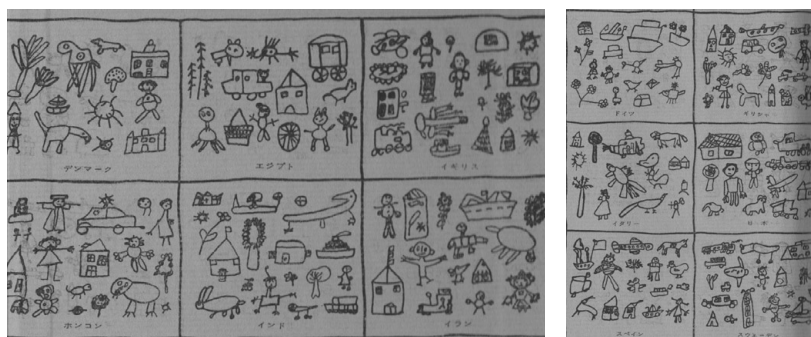
もうひとつ。これ(作品3)は、私の娘の描いた母(妻)の絵です。この絵は、娘が一世一代の絵を描くように、本当に一生懸命描いた絵だと思います。お母さんは帽子が好きなので、お母さんを描く



時は必ず帽子を被らせませす。洋服はこれ以上ないくらい丁寧に細かく模様を描いていますが、手はその当時描いている形、羽根のような形に指がたくさん生えているように描いています。文字にも興味を持っていて、字をまねて書いています。このような字を〈鏡文字〉と言いますが、読んでみましょう。「ま」「だ」「ナ」「ナ」「ミ」「ま」「ミ」「こ」と書いています。「まえだ」と正しく書けていませんし、ひらがなとカタカナが混ぜこぜですが、自分の能力と気持ち、表現、それらのありったけをここにぶつけたような絵と文字だと思えます。このように、子どもの絵というものは、自分に嘘をつきません。けなげでかわいい。懸命にそのときの能力を全て出して描こうとするのが、子どもの絵というものの特徴です。なんともいじらしいものでしょう。女子大生のみなさんも、このように描いて、育ってきたのです。

（この後、省略―子どもの成長とともに変化する絵を数点示しながら、重なりや空間の表現に苦労している様子に、むしろその子どものリアリティが見えていと述べていく。―）

子どもの絵の特徴と変化を確認してきましたが、今までの研究の成果では次のように言われています。「幼児のころは、万国共通の過程がある。」これはアメリカのローダ・ケログという人が、100万枚に及ぶ児童画を研究する中で確信したことばです。デンマーク、エジプト、イギリス、イラン、インド、香港、それらは全然遜色がありません。ここが日本です。ギリシャ、ドイツ、イタリア、スペイン、スウェーデン、このようにしてみたら世界中変わりはないということがわかります。



ローダ・ケログ「児童画の発達過程」口絵（世界の子どもたちの絵）より

しかし、ひとつ気になることが、竹ノ下先生の問いを受け出てきました。実は、その100万枚は保育所や幼稚園、小学校で集めた作品なのです。つまり、子どもが教育されている場所で集めた作品であると考えられます。教育を受けていない子どもの作品ではないということなのです。

それから、これはそんな絵を描いている根拠になっているわけですが、子どもの絵は心身の発達と深く関係しながら発達していくものなのです。V.ローウェンフェルドという美術教育学上大きな影響を与えている研究者がまとめた内容なのですが、認知機能の発達、運動機能の発達、感性や感情の発達と相互に関与しながら子どもの絵は表現されていき、変化していくということなのです。同時に、子どもの絵は同じ発達の道筋を辿るということにもなります。それは、どうしてなのかというと、人の発育、成長、発達というものがベースになっているからなのです。発達していく認知機能、運動機能、感性や感情の面と連動して発達していくのが人の表現なのだからです。



しかし、竹ノ下先生の問題提起を受けると、少し視点を増してみる必要があります。そうすると、違う面が見えてきます。それは、子どもの生活や文化、環境のことです。そういう暮らしの中で、子どもは成長し表現も培われていくのですから、学校や暮らしの文化などは大きな影響を持つでしょう。それに興味や関心。学校の指導の下で育まれていくこともありますし、学校の指導がない場合もあるでしょう。独自に持つ色々な興味や関心、それらを抱くと表現の傾向が変わっていきます。そういうようにして、子どもは大きくなっていくのですから、多少の差異がこの辺りに出てくるということがいえるでしょう。

全体を概していうと、同じような発達過程を通して、段階的に全ての子どもは成長していきます。ですから小学校の1年生の時に、例え全然まだ描けない様子があつたとしても、一緒に暮らしながら絵を描いたり交流したりしていく内に、しばらくすると追いついて、同じように描けるということになります。ただし、ここで重要なのは、同じ発達の過程を経て来るということです。要する時間は違いますが、同じ発達の過程を踏むということの意味は大きいことです。

もう1つ、これはそう案ずることもないという意味ですが、人間の歴史は20万年と仮定したとすると、例え2000年ぐらいの違いが表現にあつたとしても、高々1%でのことですし、まして急激な変化はここ100年、200年のことですから、一見大きな違いがあるように見えても、その時間でのことは長い歴史の中での現代の部分、ここ直前の0.1%の長さの時間で起こった急激な出来事や変化ということができます。そのようなことは、後で取り返しが効いたり調整できたりすることではないでしょうか。つまり、(ガボンの子どもと日本の子どもは)一見違う表現を見せているが、そこには発達上近いものを持っていて、生活環境や文化、経験の差で誤差の様な違いが生じていると私は考えているわけです。

## 日本の子どもが学校で絵を描くということ

次に、文科省が出している「小学校はこのように考えてやっています」というものを表してみましょう。小学校学習指導要領では、「感性を働かせながらつくりだす喜びを味わう、創造活動の基礎的な能力を培う、そして、豊かな情操を養う」ということが書かれています。これが小学校で図工をする根拠になっています。では、それはどこからきているのでしょうか。これは、教育の憲法ともいえる教育基本法の前文に「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」という大きな考えの中で、先ほどの学習指導要領もできあがっているのです。教育基本法は「幅広い知識と教養、真理を求める態度、豊かな情操と道徳心を培う。そして、個人の価値を尊重し、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自立の精神を養う」と。だから、国語や算数や社会、理科と同じように、音楽や図工、体育もそのために必要であると考えているわけです。

では、その図工、正しくは「図画工作」、それは日本の文化の中でどのように取り入れられてきたのでしょうか。少しまとめてみました。日本には江戸時代から、寺子屋や私塾、藩校など、いろいろな学校制度ともいえるものがありました。そういう文化をベースにして明治5年に学制が布かれたのですが、その時に「図学」という名前でスタートをすることになりました。すぐに「図画」に変わって戦後の改革までその名がつづくのですが、お年寄りが「図画」と言うのは、この名のせいでしょう。

「図学」や「図画」のスタートは、どんな内容かという、鉛筆画だったのです。図案を描いたり、図面を作ったりする。これはイギリスの教育制度をそのまま持ってきたため、工業化のための技術指導のようなものだったといえるでしょう。ところが、日本には江戸時代から美術、豊かな芸術文化がありましたから、そのまま単なる工業技術教育のようにではなく、本来の芸術的な要素を帯びていくということになります。

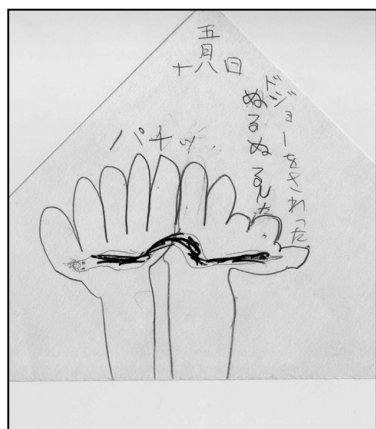
そして、明治の改革がもう少し進んで、更にもうひとつ「手工」というものが入り入れられます。「図画」に新しく、「手工」が加わってきたのです。工作や工芸のことですが、これについては職人の仕事のような内容ですから、日本の学校制度の中では殆ど対応できなかったようです。

しばらくすると当然のように、毛筆画が出てきます。鉛筆画のスタートでしたが、毛筆は一般に普及していた訳ですから、当然墨と筆で勉強したり、絵を描いたり、お手本を写したりしていくのです。

そうこうするうちに、「図画」の概念的、図式的な表現は駄目だという意見が民間から出てきます。自由民権運動や大正デモクラシーを背景に、自由画運動などが起って来るのですが、そこにある考えやそういった新しい運動が生まれたりするのは、社会的な背景だけでなく、日本がそれまでに培った長い文化、美術表現の豊かな土壌があったからなのではないでしょうか。そして、それはまた、日本の戦後の教育のように百花繚乱の時代を迎え、今に結びついて来るわけです。

このように、たとえ子どもの絵、そういうものを論じる場合でも、その国や地域の人々が長い間育んできた歴史や文化、風土、暮らしの方法、生活感情や意識などを考えないわけにはいかないものだと思います。

では終わりに、これを見てください。ガボンの指導員が描いたゴリラの絵はとても凄かったのですが、ここに示すこの絵は、日本の小学校4年生の子どもが描いたドジョウの絵です。



これを見た時、素晴らしいと感じました。子どもの絵というものを、象徴的に表していると思います。絵の全体は、一見いいかげん、適当とも言えるでしょうが、ドジョウは黒くてぬるぬるしていたから、このようにフエルトペンで塗らないと、その黒々とした感じは表せないと思ったようです。そんな中で惹きつけられたのは、ここです。この子がドジョウを可愛いと思ったところでもあるのです。このような鼻みたいなものがあって、毛がたくさんあって、可愛い目がついている、この顔。克明に表したこのかわいい顔、これを描き表したかった、これが目的だったのだと思いました。

それですから、ドジョウらしく黒く塗って、掌の上に乗っているのだということがわかれば、それでこの子は満足。こう描けば、この子どもには他にやるべきこともない、満点だったのです。学校の現場では、もしかしたらこの絵は張り出してもらえないかもしれませんが、本当はとても素晴らしい、子どもらしい作品だといえるものです。

もし今の学校で描いている絵に問題があるとする、それはこのような、素直な子どもの表現が、そのまま認めてもらえないということなのではないでしょうか。手も正しく描け、丁寧に色を塗らなければ

いけないというように。このような絵、子どもの意識や気持ちがそのまま形になったような絵も、これまで良いとされてきた絵と同じように認めて、その素晴らしさをみんなに理解してもらいたいものです。どの子どももこのように気の趣くままに描いていいのだ、それも楽しいのだというように。

どうもありがとうございました。

**一色：**2人のすばらしいご講演、ありがとうございました。では、第一部の時間があまりございませんので、ここでそれぞれお2人の先生に1分ぐらいで、コメントをいただけますでしょうか。

**竹ノ下：**この絵を評価する視点というのが、私が調査助手のギーロジェの描いたゴリラをいいなと思った視点と重なりました。絵を描くことには、思いがあって、その思いを表現できているかどうかという観点が、きちんと子どもの絵を評価する時にもあるのだ、とわかりました。私があるゴリラの絵から得たインパクトはその思いだったのですね。一方、絵画コンクールでは、絵に子どもの思いを込められなかったのだ、あのような絵ばかりになってしまったのですね。自分の中で理解が深まりました。

**前田：**実はこのスライドを作る前に、タイトルに少し悩みました。そして、『絵の発達』ということばを、ここでは私は『絵の変化』としたのです。言葉の定義から言えば、〈発達〉でいいのですが、イメージとしては何か違うような気がしました。どうしてかということ、どこかに写実的な自然主義的な絵が成長した形であるように思われ、それを意識し近づいていくことを成長とか発達とかというニュアンス、そんな気がしてしまったのです。それで躊躇して、『変化』と名づけてしまいました。

それから、竹ノ下先生の提案されたあのゴリラの絵の会が、もっと楽しい村の行事になるように考えてきました。後半でお話したいと思います。そういうことまでお話しできるかもしれないと思ったのは、交通事故で脳を損傷したアーティストが、最近10年分の記憶、知的な記憶を失ったまま、アーティストとして蘇っていくときに見せたその表現の意味や過程から、考えるに至ったものなのです。後ほどお話をさせて下さい。

**一色：**では、時間となってしまいましたので、第二部も是非ご参加ください。

## 〈第二部〉

**一色：**第二部を始めます。最初に第一部で色々聞いていただきましたが、コメント、質問などございますでしょうか。

**一般 A：**前田先生は子どもたちの絵のコンクールの審査員もされているのではないかと思いますので

すが、私が小学校の時代にとっても絵の上手な子がいて、その子は絵を出すたびに優秀賞をもらって校長先生に朝礼の時にいつも紹介されていたことがあります。その子が高等受験の時に希望する高校に進学できずに、そのためかどうか、中学の同窓会にも顔を出さなくなっていました。絵がとてもし上手だということと高校の受験は関係ないとは思いますが、私は子どもの頃、絵が上手が描けるのは頭がいい子だと思っていたのですが、その辺り、先生のご経験上、関係があるかどうか教えていただけますでしょうか。

**前田：**私の見解から言いますと、絵の上手な子どもは頭のいい子です。間違いありません。但し、頭がいいというのは、色々な意味があります。いわゆる知的な部分ともうひとつ感覚的な部分の働きが脳にはあるのですが、ものの形を正確に捉えたり表したりすることは、知的な部分が偽せる技です。また、感情や感覚を使っとうまく受容し表出したり、或は知的な方法と感覚的な方法をかかわらせ合いながら表出したりするのも脳の技です。そんなに絵が上手に描ける、絵の上手な子どもというのは、とても頭のいい子だといえるでしょう。

ただし私たちの文化は今、自然主義、写実主義に走り過ぎていて、もしかしたら感覚的、触覚的な表現をうまくする子どもを見落とすということはあることかもしれませんが。

その方の高校受験がどのような形のものだったのか、その後どのように進まれたかは知りませんが、最後に言っておきますと、いわゆる勉強というものができなくても、美術の世界なら人生の一発逆転のサヨナラ満塁ホームランを打つことはできたりするのです。そういうものが美術ですし、それらは全て、結局はその人の頭が為す技、頭の良さという評価に結ばれて来るものだといえるでしょう。

**一色：**では、他の方でご質問などございますか。

**一般 B：**自然の里山の森で活動しております。竹ノ下先生のお話を伺って私自身、とてもはっとしたのですが、今まで子どもの絵とか遊びとかは非常に大切なことで、自然の中で子どもを遊ばせなければいけないということも考えています。よく考えてみますと、今日のお話のアフリカのガボン、全く日本の生活環境とは違ったパターンの環境、そこでは、子どもたちは、社会は、或いは指導する立場ではどうなのかというのを聞かせていただきました。今まで私自身は、全く日本だけのパターンでと、視野が狭いものですから、あまり海外のことは分からなかった。先生のように直接ゴリラに接触するようなことは経験がありませんので、自分の体験と範囲内だけで、子どもの遊び場を考えていたのですが、今日はもう1つの世界の立場からお話をお聞かせていただいて、このようなことももう一度見直さなければならないのではないかと反省いたしました。そういう意味でとても貴重なお話をいただきました。ありがとうございます。

教育再生のことで、のびのび教育、これは子どもの教育については1番であるわけですが、いわゆる国家からの規範学習へと変わりつつある。これは子どもの教育だけではなくて、世の中全体、社会全体、憲法の問題もありますが、私たち国民として変化を何かに感じているのですが、それではどのように、

図工などでも国家学習になりつつあるのか。もう少し、これというような一点でお話いただければと思っています。よろしくお願いいたします。

**竹ノ下：**ありがとうございます。最初の点ですが、日本の学校文化ではないところの特徴として、これは京都大学にいらっしゃった中静（透）さんという里山研究をされていた方の論文に書いてあったのですが、日本の子ども社会には、親から、大人世界から切り離されたところで子ども集団を作る文化があった。その遊び場が野山であったりするのですが、例えば、秘密基地みたいなものがあって、そこは友だち同士は知っているのだけれども親は知らない、という場所がありますね。そこで悪いこともしたりするのですが、年長者からいろいろ学ぶ場にもなっている。学校から家に帰ってきて、手伝いをさせられて、手伝いを早々に済ませて「宿題を終わるまで遊びに行くな」と言われて、宿題をできるだけ早く終わらせて、親から離れて子ども社会の中に入っていく。

結局子どもは大人になるので、大きくなるとそこを抜けるのですが、下の子どもたちがやはり入ってくるわけです。家庭で生まれた子どもが子ども集団というものに入って、それ自体はある程度の自立性を持ったまとまった社会で、それが自然体験の場になっていたのだと思うのです。そういうものの上に、日本の自然学校みたいなものも実はあって、つまり野山に子どもたちを連れてゆけば勝手に学ぶんだ、という考えのもとで「自然の中で子どもたちを遊ばせましょう」ということをやるのだと思います。それは日本文化の特徴であり、いい面がたくさんあると思います。

それに対して、これはガボンだけでなくアフリカに共通しているようですが、アフリカの子どもたちはそのような子ども社会というものを持ちません。むしろ家庭と密接につながりがあって、子どもどうして群れることはあっても、大人のいないところで、子どもだけで集まっているという状態はほとんど見ません。親同士、大人が生業活動をしている。家事をしたり、畑仕事をしたり、野良仕事をしたりしている周辺で子どもたちがぶらぶらしている。大人と子どもがはっきり分かれていないから子ども社会がなくて、子どもは常に大人と一緒にあるように思えます。

これはどちらがいい／悪いという話ではなく、文化の問題です。だから、アフリカで子どもだけを集めて森に連れて行って、「自然学習をしましょう」としても、多分うまくいかないでしょう。むしろ大人が仕事として森に入る時に「子どもを連れてきてもいいよ」というぐらいの方が学習機会、遊びの機会になったりすると思います。それぞれの国、地域の文化的伝統というのは、意識せずにやっている中に現れているものだと思います。

もう1つ、教育再生について。私自身は政治家でもアジテーターでもありませんが、どういう立場であろうと、やはり「『おかしい』と思うことには『おかしい』と今言っておかないと危険ではないか?」と思っています。私も子どもがいますが、20年経ったときに「お父さんはあの時何をしていたのか」と言われて答えられないような生き方はしたくありません。なので、今日のように人前で話す機会があった時には、「現代の社会のあり方について、自分の立場から言うべきことは言わない」という思いで、あのスライドを作りました。



「ではどうしたらいいのか」に関して、今日の話に則して言うならば、私はやはり5教科以外の部分をもっとしっかりと認めていくべきではないかと思います。特に小学校低学年でやる生活科をしっかりと見直すことで、何かその先が見えてくるのではないかと思います。結局、これから行われようとしている道徳教育は教科になります。実は私は道徳が今まで教科ではなかったということを知りませんでした、成績のつく教科になって「これができたら何点」という評価をするようになります。学習指導要領ができて、検定教科書ができて、これを教えなさいということになっていく。そのように教わる道徳というのは、「勉強する道徳」で、勉強する道徳は身につかないですし、底が浅い。そうではない、きちんと心や生活に根ざした規範意識を育てたいのであれば、生活科とか総合的な学習の時間で、最大限子どもの自主性を発揮させながら、その自主性が社会にうまく適合するように落としていくかという努力が必要だと思います。

**一般 B：**今、心や生活とありましたが、心の点につきましては、子どもに心の話をしてもわからないと思うのですが、我々の認識として心をどのように捉えたらいいのでしょうか。

**竹ノ下：**難しいですね。政治家が言うような意味ではない〈自己責任〉かと思います。つまり、「自分の行動は自分で決めているのである、自分で決めるものである」と認識できるようになることが、私が言いたい〈心を育てる〉ということだと思います。世の中が言われてやっている、言われたことをやるというのが規範だとしたら、それは間違いです。それは心のない生き物に対するしつけ、あるいは訓練でしかないのです。そこには、心というものがない。その人は子どもだけれど、自分で決める力があって、自分で決める存在なのだとみなすということが、子どもを心のある存在だとみなすことではないでしょうか。

**一般 B：**ありがとうございました。

**一色：**他にございますか。

**一般 C：**実は小学校の時に神社の上で写生をしたのですが、その時の絵を再現しようと思うのですが、時間がないので要点だけいいますが、私は神社の瓦の絵を真面目に描いているのですが、美術の先生が「この人の絵の瓦が吹き飛ばされそうだ」と言うのです。私はそんなつもりで描いていないのです。心理テストの絵を描かされているように思いました。それについて伺いたいです。

**前田：**どのように描けばよかったのでしょうか。先生がそのように言うとは、どのように描いたらいいのかと思ったりします。多分、先生が考えていたのは、写実的に描けていたかどうか、そういうことではないでしょうか。写実性は誰でもが一番わかりやすい見方だといえるでしょう。で

も本当は、人間の表現には大きく分けたら二通りあるのです。写実的な傾向が表現の中心をなす人と感覚的な感情表現が表現のベースになる人、その二通りです。しかし、後者、感情表現の方を他の人はわからなかったり見落したりすることが多いのです。発達過程を考えた時でも、どこか写実中心、自然主義的な表現が指標になっているようなところがありますよね。本来は、それらを問題と捉え、是正し教え直す対象に子どもの絵というものがあるべきなのに、なかなかそうはならなかったのです。

それから、先ほどの心の話にも触れますが、学校とは本来、自分で多くの知識や技能をたくさん身につけて育んでいく、心も育てていく、自分で自分を大きくしていくものなのに、いろいろな方法や形で教えられ、ある場合は教えられ過ぎていく、ずっとプレッシャーをかけられ学校の価値観の下にいる内に、どこか変になったりしてくることがあります。日本の場合はやりすぎぐらいだし、若者たちは従順に従っている場合が多いわけですが、そうするうちに知らぬ間に、どこか心の中で学校を憎んでいるような、学校が嫌だと思ったりする人たちを育ててきてしまっているように考えています。だから、例えば自分で体験したら本当にすばらしい体験なのに、学校の組織の中で同じ体験をしても、居眠りしたり、イヤだとかつまらないとかという反応になることはよくあるのです。心も学校で育てていくようになりながら、その一方では同時に学校を嫌うようになっていっている、そういうところが、学校、心の問題としてあると思います。

**竹ノ下：**私は絵の専門家ではないのでコメントするのははばかれますが、私は実は絵が下手なのではなくて、描けないのです。描けないというのは、つまり物を見て、筆を動かして、形をつくるのがとても苦手なのです。だから、線がひけないのです。見て少し線をひいて、少し線をひいてと写実的な形を作る以外には描けないのです。いろいろ見て、自分で感じる部分があるのですが、私はそれを「詩的な言語を使って表現をなささい」と言われたらできるのですが、形で表せといわれたときに、全く手が動きません。

「心理テストみたいなことをさせられている」というのは、「心が絵に表れる」と思うからこそそのように解釈をされていると思います。確かに「表現」には心が表れるのですが、その「表現」が絵に表れる人もいれば、言葉に表れる人もいれば、身体を動かすことに表れる人もいるのでしょうか。そして私はどうも絵という表現では心を表すことすらできない。気分を害されるかもしれませんが、おそらく質問者さんの絵は、先生から見たら下手な絵だったのだと思うのです。けれども私は、下手な絵が描ける人がとても羨ましいです。心をこめて描けてしまう。見たものと違うものが描けていっても、構わず最後まで描ける＝表現できる人が羨ましいです。だから私が先生だったら、描いたというだけでまず褒めます。

**前田：**竹ノ下先生は、〈見た形と違って〉構わずに描くことはできないということでしょうか。（見た形に）構ってしまって描けなくなるということでしょうか。どちらもわかるような気がします。

**一般 C：**私は「この人は絵の基本ができていない」と言われたのですが、絵には基本とか応用と

かありますか。

**前田：**若干はあります。でも、先生の見方によります。そういうような基本や応用という技術から見るのではなく、「いいね」「こうしたらいいね」と言うなどして、その人に合わせて導いてくれる先生はいると思います。

**一色：**ありがとうございます。では、ここで、前田先生の第一部でお話できなかった部分をお願いいたします。

**前田：**絵の上手下手の話がでていましたから、まずそれに関連してお話します。先ほど、子どもが描いた絵、うまく形がとれていないけれど、ママに抱っこされている絵とか、まっすぐに綺麗な髪のお母さんを描いている絵がありました。また、うまく重なりが描けなくて苦勞している絵など、色々ありました。決して上手とはいえないあの形、そこにあったあの歪み、その中にこそ、その矛盾の中にこそ、子どもの表現の一番重要な部分があったのではないかと、私は思っているのです。

子どもが自分で絵を描くということ、自分でペンを持って表現するということ、この奥行きのある複雑な世界を、こういう人や物を、色々なものを描こうとしたら、それはずいぶんと難しいことではないでしょうか。歪みや矛盾がでたりするのは当たり前です。人類が絵をうまく描けるようになったのは、つい最近のことなのです。それまではほとんど絵ではなく、立体で再現していました。ルネッサンス、科学的な知識や方法を得て、立体的にはこのように描けばうまく平面で表せているような（気がする）技法のお陰で、どうにか矛盾なく描けるようになったのです。このように矛盾をなくすような形でやってきたのが、近代以降の表現だったといえるでしょう。でも私が思うには、うまく描けないところ、あの歪みや矛盾に工夫が生まれ、その子どもの一番大切なものが現れてくると考えています。ことばを換えると、そういう工夫や特徴を子どもに生じさせるのが、歪みや矛盾だといえるでしょう。

**竹ノ下：**思い出したことがあります。絵ではなくて私の娘の話ですが、小さい頃、お風呂に入れる時に、お湯が熱かったのです。すると「温かくして」と言われました。「温かい」という言葉が〈熱い〉のではなく、〈ぬるい〉という意味で「温かくして」と言われてびっくりしたのです。

先ほどの真面目に描いた絵を「駄目だ」と言うのは、「熱いのをぬるくして」と言えなかったのを「お前は言葉を知らない」と言っているようなものだと思います。もちろん言葉を知らないから「温かくして」と言ったのですが、意図は通じているし思いも伝わっている。では「温かく」という表現を「面白い」というかということ、それも多分間違いでしょう。子どもは面白い表現をしたかったのではなく、ただ言葉を知らなかっただけで、「ぬるい」という言葉を知っていれば「ぬるくして」と言ったはずです。だからその表現が「面白い」と思うのも変だし、「駄目だ」というのも違っている。でも、表現というのは、自分の持っている表現技術とか語彙とか画力などを何とかつぎはぎしてするものです。だからいい悪い

もない。我が子のエピソードは、良くも悪くもないただの1つの出来事だったのだなあと、今のお話を聞いて感じました。

**前田：**では今から、竹ノ下先生が考えておられたことを勝手ながら想像しまして、このようにしたらガボンで楽しい会ができるのではないかと空想めいたことを、お話しいたしましょう。

これは、GOMA というアーティストです。これはディジュリドゥという世界でも最も古い楽器のうちの一つで、オーストラリアの先住民アボリジニが使っている楽器です。シロアリにユーカリの木を食べさせて自然にできた筒を、木管楽器のように使います。本当は金属も使っているので、金管楽器らしいのですが。彼はこの楽器を奏でる日本で最高のアーティストなのです。

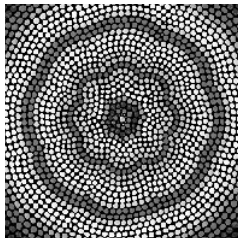


コンサートで演奏するGOMA

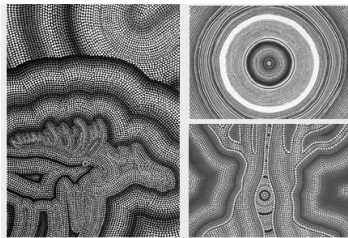
彼がこのディジュリドゥの演奏家を始めて間もなく、2009年に交通事故に遭い、外傷性脳損傷を負って記憶障害を起こしました。10年間分の記憶を失ったのです。日常生活にも支障が出てきます。集中できない上にとても疲れ、新しい記憶も5分で消えてしまうような高次脳機能障害を抱えたままの中、突然、彼は絵を描き始めました。絵は習っていません。小学校の時に少し習ったことがあるという記憶があるだけで、あるとき絵筆を持って絵を描き始めたの

です。(ビデオ映像)

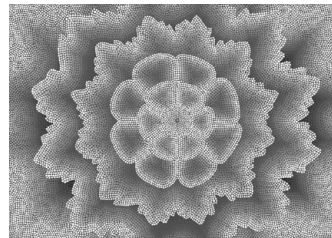
このような感じで今はコンサートをしています。これが2014年のGOMAさんのパフォーマンスです。どのような絵を描いていたのか、どのような状況だったのかを説明します。突然描き始めたときは、このような絵でした。点描で絵を描き始めたのです。色の点。点で描くというのは不思議なことに、ひと



初期の点描画



今のGOMAの点描画



徐々に複雑な絵になっている

つ点を置くと、その次にはまた点、そして点、点と描いていく。点はどこにでも置けるし、感覚的に色を変えたり並べたりしていくと何かしらの色の絵になる。知的に全体を構想したり難しく考えたりしなくても、また形を意識しなくても、気楽にひとつの点から次の点、色の点を次々と置き、並べていたりつなげたり、配ったりして色の絵にすることができるのです。まるでアボリジニが描く絵のようです。だんだんとできていく単純な丸い形など、簡易だけどそれでよい、すぐく感覚的な方法でGOMAさんは絵を描き始めました。治療にもなるので毎日毎日描いていましたから、今ではこのように複雑な形ができるようになってきた。それでも、やはり点の集合です。普通に我々が絵を描く時には、このような

描き方はしないことが多い。輪郭線で形をとって、まず形づくったりする具象画が多いのですが、彼は色の抽象画です。形を表すことが多分全くできなかったのだと思います。でも、絵が描きたかった。あの状況で描くことができる絵は、色の点点でつくる絵だったと思うのです。点でつなげていくうちに、できていく画面で絵を作ったわけです。治療でやっていくうちに、どんどんとよい感じに進化してこんなきれいな色の絵になったいった。このような形までできてきた。でも、それらはとてもパターン化された絵といえましょう。富士山の形ぐらいはパターンでいけそう、そう難しいものではない。私は彼の作品を見ていて、「脳で考えた表現ではない」と思ったわけです。「身体が欲する表現」、「身体の触覚性でできあがった絵」だと思ったのです。

GOMAさんは10年間の記憶を失くしましたから、あの不思議な楽器の鳴らし方も忘れているのです。自分が演奏者だったことも忘れています。ところが楽器を持った途端に、演奏できたのでした。身体が独特の呼吸法や演奏法を覚えていたのです。身体が記憶していた感覚が蘇ってきて、音楽にもつながります。自分はこのようなことが出来ていたのだとビデオで見せられたりして、理解もしやすかった。それでも、持続力など身体上問題は多く、身体能力や演奏は以前のようなレベルにはなかなか戻らないけれど、少しずつならできるようになっていった。

これらを私なりに考えてみると、身体が憶えていた演奏法、身体が覚えている音楽、そういうものは生命の息吹きやリズムと同調する、生命の根源とも触れ合う〈身体的な表現〉というものだと思います。しかも、GOMAさんが描いた方法、色の点で絵を描くという方法は、とても感覚的、触覚的、身体的な絵画といえるものです。すこし前に説明した形重視の絵、視覚的な整合性、自然主義的な絵、正しい形やそっくりに描く絵画とは違うタイプの絵です。このような表現を〈触覚的な表現〉といいます。

また、GOMAさんはこのようなことも言っています。これはとても面白いと思いました。『『脳イコール意識だ、それで自分は動いている』と思っていたが、今は傷ついた自分の脳を客観視しながら身体をコントロールしている何かがあるような気がする。そのようなエネルギーが自分の中にあるような気がする、それはもしかすると魂というものではないか』と言っているのです。彼は暮らしたり演奏したりしているとき、突然意識を失ったり、疲れ果ててしまっても何もできなくなったりするのです。癲癇の症状があるのですが、エネルギーがコントロールを失い、肉体を飛び出すような感じだ。「意識があちらの世界に行ってしまう」と言っています。「時間や空間、一切の隔たりがなくなって、自由にエネルギーが広がり、光に包まれながらあちらこちらのところを浮遊している、恍惚状態になる。そしてしばらくしたら、再びぬいぐるみの肉体の中に、入ってくるような意識、感覚が自分の中にあるのだ」と言うのです。あるいは、GOMAさんはそのような旅を何度もしているうちに、「脳と意識は違うものだと思うようになってきた」と述べています。

これはどういうことか私なりに考えてまとめるとしたら、身体が欲する表現、身体が覚えている身体の記憶、触覚的な表現、そういう生命と結びついている根源的なものは、知識や知恵の下層、意識の層のそのずっと下にある魂のようなものに動かされていることだから、非常に重要な替え難いものとして捉えることができると思うのです。そういう場で培われた文化やその環境の中で育まれてきた価値観や人の感覚は、まず基礎にしないといけないものと思うのです。その上で、様々に行われる暮らしの方法



や人間関係のあり方、学校などの指導、そして子どもや周りの興味関心などを尊重しながら全体を形づくる必要があると思います。

つまり、それらを合算して考えてみると、竹ノ下先生がアフリカのガボンで催されたイベントを、もう少し楽しくなるようにできるのではないかと思います。

そういうふうに思っ提案させていただくと、これなのです。

ガボンの風土と文化、ガボンの人々や子ども、それにぴったりと合った楽しい催しは、「祭り」なのではありませんか。

立体的な表現、案山子のような方法を使う。仮面と小枝や葉を利用してゴリラを形づくり、音楽や踊りを組み合わせて、素朴でエネルギーな「祭り」をつくったら、よいのではないかと思います。「ゴリラ・フェスタ」とか「キングコング・フェスタ」、「ヒューマニティ・コング・フェスタ」などと命名したりする。そのような感じの「祭り」を竹ノ下先生がガボンの村で催されたら、すごく盛り上がり村の行事になるのではないかと思います。その中で、子どもが自然を楽しめるようにもできるかもしれません。

一色：竹ノ下先生、いかがですか。

竹ノ下：おっしゃる通りだと思います。アフリカの子どもはよく踊り、大人も歌い踊ります。本当に歌と踊りが大好きな人達なのです（それを指して「アフリカ人は享乐的」などと差別的な文脈で言うのは問題ですが）。というのは、そもそもが〈無文字文化〉といって文字を遣わない人たちですので、「描く」ということも含めて「かく」という動作をしません。その代わりに身体表現と歌と語りをします。それから、色々な儀礼や祭りに使うさまざまな立体造形芸術があつて、それはかなり深いものです。そういう意味で、祭りをやればよいというのは、その通りだと思います。

今実は、やっているゴリラ村プロジェクトで、観光ガイドのトレーニングをしているのですが、それは単に「解説」をするのではなくて、「語る」ということをやろうとしています。アジアの国々でガイドのトレーニングをされている専門家の方を呼んできて、この5月に研修をしてもらったのです。どの位うまくいくかと半信半疑でいたのですが、とても素晴らしい研修ができました。研修の直後に彼らのガイドを聞いてみると、びっくりしました。饒舌に喋るのです。

その時に気づいたのが、アフリカの無文字文化というのは、日常のできごとさえも、抑揚をつけながら物語のように語る。語りが日常的にされています。語る人たちなので、語りがはまったのです。ですから、もしかすると学校でやったのが動物の絵画コンクールではなくて、動物について語るコンクールにしたら、子どもたちはわれもわれもと競い合いながら面白い話をたくさんしてくれたかもしれません。

実際祭りとか儀礼においても語りがとても重視されていて、歌と語りは殆ど区別がなかったりします。誰か1人が語っている。それは何か祝詞のようなものを唱えているのかと思ったら、即興でその日に起きたことなどを歌っているのです。そうするとその歌に合わせてダンスをしたりして、お祭りが出来ていくので、正に、祭りというのはその通りだと思います。

立体造形に対して、子どもにさせるという時にそれが有効かどうか少し分かりません。造形の経験

がなくて、形に残るものを作るという体験がありません。熱帯林地域では、日用品のかなりの部分が使い捨てです。といっても、日本でいう悪い意味の使い捨てではなくて、自然のものをとってきて少し使って自然にかえすという形です。大人達が生活道具を作る時には、例えば山刀の柄を作る時に、何もなくてもいいのに、わざわざそこに何かを彫ります。そのような道具の装飾はとても面白いのですが、「ゼロから作品を作りなさい」と言うとうつかしい。けれど、生活との関連があるととても創造性が発揮されるのだとしたら、恐らく絵よりも造形、立体表現の方がむいていると思います。

とても貴重なご提案をいただきました。ありがとうございました。

**一色：**全体をいろいろとお2人の先生から伺って、やはり〈文化の違い〉というのが大きなテーマでした。その中でもアフリカの子どもたちはどういったところに特徴があるのかということであると、今お話があったように物語を語るとか、そのようなことは日常的である。そうすると、子どもたちも小さい頃からそういったものを環境の中で得て、それで歌を歌ってみたり、ダンスをしてみたりということで、やはり文化の違いで子どももそこからまずは段々と成長していくということであると思いました。従いまして、アフリカはアフリカでそのようなものがあるし、中東は中東でまた別のものがあるし、日本、中国はまた別の違う形でしょうし、ヨーロッパ、アメリカでも違っている。違いがあるけれども、子どもたちが一体どのようなところでどうなるかというのは、これから色々な形で見ていきたいと、今日のアフリカと日本のことで感じました。

どうもありがとうございました。